

教育現場における心理臨床家の役割

— 教員への不登校支援に視点をあてたアンケート調査から —

鹿児島市精神保健福祉交流センター 中村 誠文

和文要旨

本研究では、第1に筆者がおこなった不登校児童生徒への援助として、教員が心理臨床家（カウンセラー等）に求める役割（支援）を明らかにしたアンケート調査を整理し、第2に教育現場や不登校支援での教員の意識やニーズの研究を整理・再考し、不登校支援で心理臨床家（カウンセラー等）に求める役割（支援）を考察することを目的とした。教員が不登校支援で心理臨床家（カウンセラー等）に求める役割として、特に「連携」と「教員への支援（コンサルテーション等）」であることが明らかとなった。心理臨床家（カウンセラー等）には、学校システムやコミュニケーションに視点をあて支援するアプローチやスキルが求められていること、「連携」や「教員への支援」を円滑におこなっていく為にも教員とのコミュニケーションが重要であることが示唆された。

キーワード：不登校支援 心理臨床家の役割 教員への支援 連携

I はじめに

「不登校」を理由として一年間に30日以上欠席した児童生徒は、平成13(2001)年度の13万8千人（在籍比率1.23）をピークに増加の一途をたどっていたが、平成14(2002)年度からやや減少をみせ、その後10年間は12万人前後を推移していた。平成24(2012)年度には、11万2千人（1.09）と近年では不登校児童生徒数が最小となったが、平成25(2013)年度では増加と転じている。これらのことから不登校問題は現在も大きな問題であるといえる。

1989年に発足した文部省(当時)の「学校不適應対策調査研究協力者会議」が平成4(1992)年度の報告書では、児童生徒本人に問題があるということを否定して、「登校拒否は、どの児童生徒にも起こりうるものである」というように登校拒否観を転換し、発表した。この視点から不登校問題をとらえる動きが学校教育現場に広まっていった。不登校がどの子にも起こりうるのであれば、どの

教員も不登校児童生徒と関わる可能性があるといえる(網谷ら,2001)。

不登校やいじめなど学校生活に不適應を示す児童生徒の増加に対しての対応のひとつとして、平成7(1995)年度から始まった文部省(当時)の「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業（以下SC事業）」がある。その後、平成13(2001)年度からは「スクールカウンセラー活用補助事業」となり今日まで配置校の広がりと共に活動が進んでいる。また、平成20(2008)年度からは、スクールソーシャルワーカーの導入とともに広がりを見せている。

現在、SC事業が開始されてから20年が経過しようとしている。当初は、学校教育現場がスクールカウンセラー（以下SC）にどのような役割（支援）を求めているのかという学校現場の認識やニーズを調べようという研究が多数あり、現在も多くみられる。近年、不登校に視点をあて、不登校児童生徒の支援として教員への意識調査や研究が少しずつではあるがみられるようになったが

多くはない。河村ら(2005)の研究では、SCに求めるニーズとして「不登校問題」が最も多い。そこで、不登校に視点をあて、不登校児童生徒への援助として教員が心理臨床家(カウンセラー等)にどのような役割(支援)を求めているのかということをも明らかにしていく必要があるといえる。不登校児童生徒を支援する際、心理臨床家(カウンセラー等)と教員の連携は必須であり、支援が円滑に、また成功するかのもいえる。そこで、本研究では、第1に筆者がおこなった不登校児童生徒への援助として、教員が心理臨床家(カウンセラー等)にどのような役割(支援)を求めているのかということをも明らかにしたアンケート調査を整理し、第2に不登校支援での教員の意識やニーズ等の過去の論文研究を整理・再考し、不登校支援で心理臨床家(カウンセラー等)にどのような役割(支援)を求めているのかということをも考察することを目的とする。

II 不登校支援に関するアンケート調査

1. 研究方法

(1) 調査時期 2006年6月1日～6月30日

(2) 調査対象・手続き

事前アンケート調査(2006年1月)をもとに作成した質問調査紙を鹿児島県の公立小学校、中学校の現職教員330名へ配布、郵送により回収した。330名中151名からの回答を得た(回収率45.8%)。小学校教員(男性13名、女性29名)、中学校教員(男性63名、女性45名)、不明1名であった。年齢構成は、20歳代26名、30歳代64名、40歳代34名、50歳代17名、60歳代7名、無記入2名、不明1名で、平均年齢は38.8歳であった。分析は、不明1名を除外とし150名を対象として分析を行なった。

(3) 調査内容

教員の不登校のとらえ方、不登校児童生徒への関わり方・支援として難しかった点について、より実状を把握する為に本調査の前に事前アンケート(2006年1月)を実施した。事前アンケート調査の結果と伊藤・中村(1998)の研究から学校教育活動における具体的な事象(役割)を表す47項目、中島ら(1997)の研究からSCに期待する活動、知識をもとにアンケートを作成した。

さらにフェイスシートでは、性別、年齢、教員歴、勤務種、勤務先、不登校の児童・生徒に関わったことがあるか、研修経験、今までの勤務校でのSCの有無、現在のSCの有無について尋ねた。

今回は、不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)を中心に報告をおこなうこととする。

2. 結果と考察

(1) 不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)

「不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)」の項目を平均得点(評定の最高値を4、最低値を1として得点化している)の高い順からTable 1に示す。

不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)として、本研究の22項目、全体的に平均値が高くほとんどが望まれているといえる。不登校児童生徒への支援ではなく「親へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)」が最上位にきていることから、教員は児童生徒への対応は教員自身がとっており、保護者とのコミュニケーションを難しいと感じていることがうかがえる。そして、「学校・教員との連携」といったように連携を望んでいることもみとれた。「教員を対象としたカウンセリング等の研修会の開催」・「教員へのコンサルテーション(教員が担当している不登校児童生徒への対応に

についての助言)を行なう」・「教員を対象とした予防的活動(ストレス対処スキル, 対人関係スキル等を高める講演会や演習等)」・「教員へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)」・「教員に対しての不登校理解のための講演会等の開催」など, 教員が不登校児童生徒と関わる際, どうかかわってよいかという「教員の関わり方への支援」が望まれていることが明らかになった。

具体的項目がどのように構造として認知されているかをみるために, <不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)>についての因子分析(主因子法, promax回転)を行ない, その結果を示したものがTable 2である。不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)の尺度構成は, 4因子が抽出された。各因子を, その項目の内容から解釈して「児童生徒への直接支援」「教員への支援」「専門的支援」「連携」とそれぞれ命名した。

Table 3の因子平均値をみると, 全体的に非常に得点が高く, その中でも「学校・教員との連携」を望んでおり, その次に「教員への支援」と不登校児童生徒よりも教員への研修会やコンサルテーションといった支援が望まれていることが明

らかになった。心理臨床家は, 直接的支援・専門的支援(カウンセリング, 心理検査等)が望まれているのではと, とらえる傾向があるが, 本研究では専門的支援も望まれてはいるが4因子の中でも得点の平均は下位にあることが明らかとなった。

本研究で興味深いのは, 不登校児童生徒へのカウンセリングを望んでいると思っていたが, 保護者へのカウンセリングをより求めているということが明らかとなった。不登校児童生徒に対しての心理臨床家(カウンセラー等)の役割(支援)として, 心理臨床の専門知識は当然であり, それをふまえた上で教員は支援を求めている。心理臨床家(カウンセラー等)に対して期待する役割として, 不登校児童生徒にするよりも教員への研修会やコンサルテーションといった「教員への支援」が望まれていたことである。これは, 児童生徒の問題は, 教員の課題であり直接関わるのは教員の責務で教員の役割意識をもっていることがあるのではと推察できる。最も望まれていることは, 「学校・教員との連携」である。教員は, 学内の成員, 教員と児童生徒, 教員と保護者など, それぞれとの関係や連携を大切にするとといった「つなぐ」ということを求めていることがいえる。

Table 1 「不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)」の各項目得点平均と標準偏差

	質 問 項 目	M	SD
1	親へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)	3.58	.547
2	教員との連携	3.53	.540
3	不登校児童・生徒へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)	3.52	.588
3	学校との連携	3.52	.611
5	一時的な関わりではなく, 継続した取りくみ	3.51	.553
6	不登校児童・生徒と信頼関係を築く	3.48	.565
7	教員を対象としたカウンセリング等の研修会の開催	3.45	.598
8	教員へのコンサルテーション(教員が担当している不登校児童・生徒への対応についての助言)を行なう	3.40	.579
8	気軽に相談できるネットワークの確立	3.40	.614
10	すぐに対応できるようにスクールカウンセラーの常置	3.39	.712
11	教員を対象とした予防的活動(ストレス対処スキル, 対人関係スキル等を高める講演会や演習等)	3.34	.646
12	不登校予備軍・健康な生徒を対象とした予防的活動(ストレス対処スキル, 対人関係スキル等を高める講演会や演習等)	3.32	.652

13	心理臨床家が担当している生徒の経過報告	3.31	.614
14	教員へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)	3.30	.601
15	保護者に対して専門機関を紹介すること	3.24	.599
16	教員に対しての不登校理解のための講演会等の開催	3.22	.734
17	教員に専門機関を紹介すること	3.19	.682
18	不登校児童・生徒への有効な働きかけの方法論の確立	3.12	.769
19	不登校児童・生徒との連絡	3.10	.657
20	電話相談	3.02	.742
21	不登校児童・生徒への心理検査	2.96	.775
22	不登校の児童・生徒の自宅訪問を行なう	2.84	.753

Table 2 不登校に対する心理臨床家(カウンセラー等)に望む役割(支援)についての因子分析結果(プロマックス回転後)

	I	II	III	IV
<児童生徒への直接支援>				
22) 不登校児童・生徒と信頼関係を築く	.805	-.056	-.082	.088
20) 一時的な関わりではなく, 継続した取りくみ	.672	.126	-.060	.164
21) 気軽に相談できるネットワークの確立	.582	-.054	.105	.318
11) 不登校の児童・生徒の自宅訪問を行なう	.434	.018	.290	-.082
5) 不登校児童・生徒との連絡	.405	.081	.257	-.069
<教員への支援>				
4) 教員を対象としたカウンセリング等の研修会の開催	.027	.684	-.016	.044
7) 不登校予備軍・健康な生徒を対象とした予防的活動(ストレス対処スキル, 対人関係スキル等を高める講演会や演習等)	-.022	.632	-.085	.215
19) 教員へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)	.302	.574	-.028	.011
12) 教員へのコンサルテーション(教員が担当している不登校児童・生徒への対応についての助言)を行なう	.122	.533	.023	.176
17) 教員に対しての不登校理解のための講演会等の開催	-.284	.425	.300	.293
<専門的支援>				
3) 不登校児童・生徒への心理検査	.019	-.055	.870	-.127
2) 電話相談	.075	-.065	.559	-.019
1) 不登校児童・生徒へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)	.326	-.103	.498	.024
6) 教員に専門機関を紹介すること	.053	.093	.431	.182
10) 親へのカウンセリング(専門的な知識をいかした相談活動)	.351	.022	.420	-.004
<連携>				
14) 学校との連携	.350	-.068	-.193	.846
9) 教員との連携	.105	.174	-.050	.572
13) 心理臨床家が担当している生徒の経過報告	.316	.031	.047	.501
因子間相関		.505	.622	.563

注) 冒頭の番号は項目の提示順番を意味する。

注) 因子負荷量が.40以上のものを太字にした。

Table 3 「不登校に対しての期待される役割（支援）」の各因子項目得点平均と標準偏差

	因子項目	M	SD
I	児童生徒への直接支援	3.27	.482
II	教員への支援	3.34	.487
III	専門的支援	3.25	.484
IV	連携	3.45	.508

Table 4 「不登校に対しての期待される役割（支援）」の各因子項目得点平均と標準偏差

	児童生徒への直接支援	教員への支援	専門的支援	連携
本人・家庭の問題				
・児童・生徒と保護者との関係がうまくいっていない				
・基本的な生活習慣が確立されていない、生活リズムが崩れている児童・生徒	.237**	.154	.17*	.142
・精神的な弱さ、自分に甘く頑張れない児童・生徒				
・保護者の養育態度(溺愛, 放任) 等				
社会・規範の問題				
・社会の競争主義(偏差値重視, 学歴重視)の風潮	.061	.045	.085	.026
・学校のきまり等をめぐり登校できない児童・生徒				
自己防衛				
・健康な子どもが自分を守ろうとしているもので自分が登校できない理由を探している状態の児童・生徒	.147	.227**	.162	.177*
対人関係の問題				
・もともと対人関係が苦手だったり、嫌がらせをする生徒の存在や、教員や友人との関係につまずいている児童・生徒	.119	.185*	.083	.253**
物理的な問題				
・行事などによる過密スケジュールにより、教員と生徒の話がもてない	-.037	.073	.024	.031

** 相関係数は1%水準で有意(両側)である。

* 相関係数は5%水準で有意(両側)である。

(2) 不登校のとらえ方と不登校に対して望まれる支援

不登校のとらえ方と不登校に対して望まれる支援の因子間相関係数を算出した結果をTable 4に示す。分析の結果をまとめると次のような事がいえる。①「本人・家庭の問題」ととらえている教

員は、不登校児童生徒への直接的な支援、心理検査やカウンセリング、電話相談といったよくいわれる専門的な支援を望んでいる傾向にある。②「肯定的自己防衛」ととらえている教員は、不登校児童生徒への支援というよりも、教員を対象とした研修会、カウンセリング、コンサルテ

ションと教員への支援と学校、教員との連携を望んでいる傾向にある。③「対人関係の問題」ととらえている教員は、特に学校、教員との連携を望んでおり、教員を対象とした研修会、カウンセリング、コンサルテーションと教員に対しての支援も望んでいる傾向にあるということが明らかとなった。

Ⅲ 教育現場や不登校支援における心理臨床家の役割に関する論文研究の整理

1. 研究方法

文献研究の方法については、教員を対象として教育現場や不登校支援において心理臨床家に何を求めているのかについて述べられている文献を選定し、どういったことが求められているのか、内容の整理を行うことにした。文献を収集するにあたり、各領域の書籍、学会誌論文を調べ、CiNii-Aericles(国立情報学研究)も活用した。

2. 論文研究の整理

SC事業に先立って1995年の3月に学校臨床心理士のワーキング・グループにより『学校臨床心理士のためのガイドライン』が作成され、村山・大塚・谷口・鶴養(1997)は“学校臨床心理士が行うべき業務”を12項目にまとめている。また、「スクールカウンセラー活用調査研究委託実施要項」においては、次のようにSCの役割を記している。「①児童生徒へのカウンセリング、②カウンセリング等に関する教職員および保護者に対する助言・援助、③児童生徒のカウンセリング等に関する情報収集・提供、④その他の児童生徒のカウンセリング等に関し、各学校において適当と認められるもの」(滝口,2005,p.142-143)。これまでSC事業の導入期に、教育現場における心理臨床家(カウンセラー等)の役割に関する研究がいく

つかみられる。

教育現場でのニーズや心理臨床家の役割についての報告はいくつかあるが、不登校に視点をあて不登校児童生徒の支援としてどのような役割が求められているのかという研究は少ないといえる。SC事業が導入期には、調査研究がおこなわれていたが、その後は、連携や発達障害への支援といったテーマ別での研究が多く、個別性を中心とした事例研究を含めた質的研究が多く見受けられる。下記に教育現場でのニーズや心理臨床家の役割に関しての研究や教員が不登校支援をどう捉えているのかという研究の整理を試みたい。

(1) 伊藤(1996)の研究

伊藤は、SC制度に対する学校現場の認識と要望についてまとめている。SCに対する教員からの要望について、まず、SCに望む人物像として小中学校では、子どものことを第一に考えてくれる人、次いで専門的な知識や技術を重視していることがわかり、学校・教員への理解や協調という要素は、それに次ぐ条件として挙げられている。さらに、SCに対して期待する役割について、生徒のカウンセリング、教師のスーパーヴィジョンへの要望が多く、「研修指導」や「教師自身の相談」に対する要望も強かったということを報告している。

(2) 中島ら(1997)の研究

中島らは、義務教育現場における教員の期待するSC像について、SCに期待される可能性のある活動・知識・資質および教育現場に必要とされるシステムの4側面についてまとめている。SCの活動に対する期待では、心理臨床家としての専門性に基づく直接的援助と検査などの媒体を介した間接的援助とに分化した認知と学内の成員やシステム、また学外の機関などを「つなぐ」リエゾン機能への期待も見いだした。SCの知識に対する期待も同一の傾向がみられ、心理臨床の専門知識

を有していることが最も優先的に期待されている。また、心理臨床の専門知識単独というよりも、教育学や教育心理学、関係づくりといった領域と関連をもった総体としての知識が期待されている。SCの資質に対する期待では、教員の立場に理解を示し、教員・児童・生徒・保護者それぞれとの関係や連携を大切にするといった内容の、関係性尊重の因子が最上位に位置しており、義務教育現場における教員の期待するスクールカウンセラー像について報告している。

(3) 伊藤・中村(1998)の研究

伊藤・中村は、学校現場へのSC制度について教員とSCへの意識調査を行っている。研究では、①双方が教員・SCに期待する役割、②SCに必要と考える条件、③制度への関心、④制度導入に伴う変化の予測を尋ね、教員がSCに心理臨床に関する専門性と同時に教育的役割も求めていることが報告されている。

(4) 三浦・石隈(1998)の研究

三浦・石隈は、高等教員が捉える生徒の教育援助ニーズおよびSCの必要性と役割等を明らかにし、SCと教員との協働による総合的な教育援助活動の可能性について考察している。SCに期待している役割は、二次～三次的教育援助のアセスメントとカウンセリング、専門機関との連携、相談室の管理・運営であったと報告している。

(5) 有本ら(2000)の研究

有本らは、SCに対する教員のニーズの構造を明らかにし、教員への援助のあり方を検証している。教員がSCに取り組んでもらいたい問題の選択率上位2位は、「不登校問題」「対人不適応・孤立」であり、「心身症」では中・高等学校、「発達・学習障害」では小学校が予測因子としてそれぞれ有意であり、校種によってSCに求められる専門性が異なることが示されている。期待する役割の

選択率上位3位は、「生徒のカウンセリング」、
「教師への助言」、
「保護者面接・連携」であったことが報告されている。

(6) 網谷・菅野(2001)の研究

網谷・菅野は、不登校に関する教師の意識というテーマで、不登校児童生徒への対応について取り上げ検討し、登校・欠席にまつわる教師の考え方と、不登校のタイプ別への教師の対応の2点に注目し研究をおこなっている。不登校児童生徒への対応として、24項目を主因子法promax回転による因子分析を行い、6因子を採用している。各因子を、その項目の内容から解釈して、「登校刺激」、「本人や保護者との面接」、「校内での協力体制作り」、「友人を通しての対応」、「専門機関との連携」、「静観的対応」とそれぞれ命名している。「情緒的混乱型」、「非行型」、「無気力型」と不登校のタイプ別への教師の対応の特徴をまとめている。

(7) 荒木・中澤(2007)の研究

荒木・中澤は、SCに対する教師のニーズを把握することを目的として研究を行っている。SCに求める役割として「生徒に対する援助」では、生徒に対する直接援助(カウンセリング)、「教員に対する援助」では、専門的知識を「研修」「アドバイス」という形で間接援助(コンサルテーション)としての役割が期待されていることが明らかとなっている。小学校・高校教師は、コンサルテーションを、中学教師はカウンセリングを望んでいるということも報告している。

(8) 吉澤・古橋(2009)の研究

吉澤・古橋は、中学校で実際にSCと共に働く一般教員を対象に調査を行ない、①教員とSCの連携が中学校現場でどのように行なわれ、②教師がSC制度をどのように受け止め、SCを活用しているのかを通して、中学校現場におけるSC制度

がどのくらい定着しているのかを明らかにしていくことを目的に研究を行なっている。教員は、SCの専門性を理解し、互いの専門性を生かしながら協働して生徒の支援をしていくことを希望しており、カウンセリングが必要な面ではSCの専門性を十分生かし、生徒の支援を行ってほしいと考えていること。教員は生徒のことについての相談をより希望し、教員のカウンセリングについては、期待していないことがわかったと報告している。

IV 総合考察

教育現場でのニーズや心理臨床家の役割（支援）についての研究は、SC事業の導入期にいくつかの調査研究があるが、SC事業が20年を迎え、近年ではSC活動の実情や評価に対する研究がみられる。また、不登校に視点をあて、不登校児童生徒の支援として教員への意識調査や研究が少しずつではあるがみられるようになった。しかし、不登校児童生徒の支援としてSCにどのような役割が求められているのかという研究は、少ないということが今回の研究で浮き彫りになったといえる。

先行研究と本研究での結果を見てみると共通しているところも多く見受けられる。心理臨床の専門知識を有していることが前提となり、児童生徒への直接的な支援（カウンセリング）、教員への間接的な支援（コンサルテーション）、学内の成員やシステム、また学外の機関などへの連携・協働が求められているといえる。教育現場と不登校支援で心理臨床家（カウンセラー等）に求める役割（支援）で共通点が多くみられるのは、有本ら（2000）や河村ら（2005）の研究でSCに求めるニーズとして「不登校問題」が最も多いと報告されていることから、教育現場で求める役割＝不登校支援で求める役割として捉えられている可能性が考えられる。教員が教育現場で心理臨床家（カウ

ンセラー等）に求める役割（支援）を考える際に、真っ先に不登校児童生徒を想定して考えるのではないかと示唆される。

本研究の調査で興味深いのは、「親へのカウンセリング（専門的な知識をいかした相談活動）」が最上位にきていること、不登校児童生徒への直接的支援よりも間接的な支援を求めていることが明らかとなり、最も望まれている役割は、「学校・教員との連携」であったことである。教員は、教員間、教員と児童生徒、教員と保護者など、それぞれとの関係や連携をとった「つなぐ」というリエゾン機能を心理臨床家の役割（支援）として求めていることが中島ら（1997）の先行研究と同様に明らかとなった。そして、教員が不登校児童生徒と関わる際、どう関わってよいかという「教員の関わり方への支援」が望まれていることも明らかとなった。これは、近年、不登校の様態の変化に伴い、「情緒や不安が否認され問題意識に乏しい」「一見すると元気で引きこもることも少ないが耐性に欠ける」等の異なるタイプの不登校が増え、支援の在り方として1対1での関係では支援の限界があることが影響していると考えられる。それと関連しているのか、本研究では専門的支援も望まれてはいるがTable 3の4因子の中でも得点の平均は下位にあることが明らかとなった。また、不登校のとらえ方によって不登校児童生徒に対して望まれる役割は異なり、①「本人・家庭の問題」ととらえている教員は、不登校児童生徒への直接・専門的な支援を望んでいる傾向、②「肯定的自己防衛」ととらえている教員は、コンサルテーションと連携を望んでいる傾向、③「対人関係の問題」ととらえている教員は、学校・教員との連携を望んでいる傾向にあるということが明らかとなった。

教員が不登校支援で心理臨床家（カウンセラー等）に求める役割（支援）として、特に「連携」と「教員への支援（コンサルテーション等）」であることが明らかとなった。これは学校に来校す

るSCの勤務形態も大きく影響していることが考えられる。SCとしても児童生徒と普段から直接関わり、多くの時間を共にしている教員や保護者への支援をおこなっていくことが有益であるといえる。このことから、心理臨床家（カウンセラー等）には、児童生徒と関わらずとも学校システムやコミュニケーションに視点をあて支援するアプローチやスキルが求められていることが必要と示唆された。それと同時に吉澤ら(2009)は、教員との日常的な関わり的重要性について報告をおこなっており、「連携」や「教員への支援」を円滑におこなっていく為にも教員とSCのコミュニケーションは重要であると、本研究でも示唆された。

引用・参考文献

- 網谷綾香・菅野信夫(2001)：不登校に関する教師の意識－教師の登校重視度および不登校のタイプとの関連－。広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第50号，333-339。
- 荒木史代・中澤潤(2007)：スクールカウンセラーに対する教師のニーズ。千葉大学教育学部研究紀要第55巻，87-95。
- 有本和晃・森俊夫・黒沢幸子(2000)：スクールカウンセラーに対する教員のニーズに対する研究。日本教育心理学会総会発表論文集(42)，406。
- 藤岡孝志(2005)：不登校臨床の心理学。誠信書房。
- 東山紘久(2002)：スクールカウンセリング。創元社。
- 保坂享(2000)：学校を欠席する子どもたち 長期欠席・不登校から学校教育を考える。東京大学出版。
- 堀江幸治・江村洋一郎・深町俊介・吉村岳史・吉村勝・米丸宗秀(1998)：小学校教師の不登校児に対する見方・関わり方について。山口短期大学学術研究所報告，19-23。
- 稲村博(1994)：不登校の研究。新曜社。
- 石田美清(1999)：児童・生徒指導要録記入に関する調査研究－不登校児童生徒の扱いを中心として－。鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)第14巻，81-88。
- 石隈利紀(2000)：不登校児やLD(学習障害)児のための援助チームに関する研究－小学校におけるスクールカウンセラーの効果的な活用をめざして－。研究助成論文集第36号，18-28
- 伊藤美奈子(1993)：学校カウンセリングに対する教師と臨床家の見解についてのフィールドワーク的研究。神戸国際大学紀要第45号，33-46。
- 伊藤美奈子(1996)：スクールカウンセラー制度に対する学校現場の認識と要望について。カウンセリング研究29(2)，32-41。
- 伊藤美奈子(1999)：スクールカウンセラーによる学校臨床実践評価ならびに学校要因との関連。教育心理学研究第47巻第4号，521-529。
- 伊藤美奈子(2000)：スクールカウンセラー実践活動に対する派遣校教師の評価。心理臨床学研究第18巻第1号，93-99。
- 伊藤美奈子・平野直己編(2003)：学校臨床心理学・入門 スクールカウンセラーによる実践の知恵。有斐閣アルマ。
- 伊藤美奈子・中村健(1998)：学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査－中学校教師とカウンセラーを対象に－。教育心理学研究第46巻第2号，121-130。
- 上村恵津子(2002)：小学校におけるスクールカウンセラーの有効活用に向けた援助体制－不登校児童の事例を通して－。信州心理臨床紀要第1号，81-94。
- 河合隼雄(2003)：不登校。金剛出版。
- 河合隼雄・山中康裕・小川捷之総監修，小川捷之・村山正治責任編集(1999)：心理臨床の実際 第2巻 学校の心理臨床。金子書房。
- 河村茂雄・武蔵由佳・粕谷貴志(2005)：中学校のスクールカウンセラーの活動に対する意識と評価－配置校と非配置校の比較－。カウンセリング研究38(1)，12-21。
- 三浦美智子・石隈利紀(1998)：高等学校における教育援助ニーズとスクールカウンセラーに関する学校心理学的研究－管理職・一般教員・養護教諭の意識調査に基づいて－。日本教育心理学会総会発表論文集 (40)，361。
- 村山正治(1998)：新しいスクールカウンセリング。ナカニシヤ出版。
- 村山正治・山本和郎編(1995)：スクールカウンセラー その理論と展望。ミネルヴァ書房。
- 村山正治編(2000)：[現代のエスプリ] 別冊 臨床心理士によるスクールカウンセラー実際と展望。至文堂。
- 中島義実・原田克己・草野香苗・太田宣子・佐々木栄子・金井篤子・蔭山英順(1997)：義務教育現場における教員の期待するスクールカウンセラー像。心理臨床学研究第15巻 第5号，536-546。
- 西岡一郎(2002)：不登校に対する教師の認知についての研究。中国四国教育学会 教育学研究紀要第48巻第1部。
- 大塚義孝編(1996)：スクールカウンセラーの実際 ころの科学増刊。日本評論社。
- 佐藤修策(2005)：不登校(登校拒否)の教育・心理的理解と支援。北大路書房。
- 白井利明(1992)：登校拒否児に対する青年・大人・教師の認知の違い。教育心理学研究第40巻第1号，1-9。

菅野信夫・網谷綾香・樋口匡貴(2001)：不登校に関する保護者の意識と対応—教師を対象とした調査との比較検討も交えて—。

広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第50号, 291-299.

滝口俊子(2005)：新訂 学校臨床心理学. 財団法人 放送大学教育振興会.

滝口俊子・倉光修(2005)：スクールカウンセリング. 財団法人 放送大学教育振興会, p142-143.

筒井千恵・仙波圭子・大野由美子・小林正幸(1998)：不登校事

例に対する教師の前兆行動の把握と対応に関する研究. カウンセリング研究第31巻第2号, 117-125.

氏原寛・谷口正巳・東山弘子編(1991)：学校カウンセリング. ミネルヴァ書房.

吉澤佳代子・古橋啓介(2009)：中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する教師の評価. 福岡県立大学人間社会学部紀要Vol.17 No.2,47-65.

Roles of Clinical Psychologist at School : A Study Focusing on Supporting School Teachers Working with Non-attendant Students

NAKAMURA Masafumi

The purpose of this study is to find out what school teachers expect clinical psychologists such as school counselors when teachers work with non-attendant students. The questionnaires given to the teachers revealed that what they expect school counselors most was collaboration and support to teachers, rather than direct support to students such as counseling. The study also suggested that it is required for school counselors to have skills to approach teachers with knowledge on school systems and community resources and that it is important to communicate with teachers.

KeyWords : support to non-attendant students, roles of clinical psychologist at school, supporting school teachers, collaboration